

巻頭言

ひびの入った水がめ

日本ロゴセラピスト協会会長 勝田茅生

2019年の第12回ロゴセラピスト講演会では、二人のロゴセラピスト、和才恵理子さん、山本孝子さん、そしてゲスト講演には小説『あん』の作家ドリアン助川さんが登場してくださいました。どれも心に響く良い話でしたが、この巻頭言のために、三人の講演者の話の中に共通するテーマを見つけたいと思いあぐねました。

そこで思い至ったことは次のようなことでした。人間はそれぞれいろいろな「ちがい」を持って生きています。時にはその「ちがい」によって集団社会から差別を受けることすらあります。けれどもこの「ちがい」というのは、実はその人間の本来の唯一性と独自性の本質ではない、ということです。それについて考えたことをご紹介しますと思います。

1. 「ちがい」と「自分らしさ」

<人それぞれの「ちがい」>

私が留学するために初めてドイツに渡ったのは今からちょうど50年前になりますが、その時のカルチャーショックと言えば、ヨーロッパ人の容姿が千差万別だということでした。目の色、顔の形、肌の色だけではありません。それまで黒髪だけの社会に生まれ育ってきた私にとって、金髪、ブルネット、茶系のブロンド、赤毛、黒髪、縮れ毛、真っ直ぐな髪など、髪一つとってもさまざまな「ちがい」があることが新鮮でした。そして『そ